



学び・学ばせる関わりと 学びの場の雰囲気

1 主体的な学び

私は心理療法・カウンセリングの臨床実践を生涯のテーマとしている。これまでに教えを受けてきた諸先達に少しでも近づきたいと研鑽を積んでいるので、本文で「主体的な学び」を考察するためには、私自身の学びの

体験を素材としたい。

「主体的に学ぶ」とはどういうことか？ 改めて考えてみた時に最初に浮かんだ情景がある。私が大学院生の時に小木貞孝（作家名、加賀乙彦）先生が執筆に専念するため大学を辞することになり、われわれに最後の授業で研究者の心得としてご自身の体験を語ってくださった。その中から私は秘かに「自戒の3か条」を選んだ：①流行を追った読書をするな（学問の流行は10年ごとに変わ

るので無意味だから) ②他人とほんの少し違う自分の興味を伸ばせ(それを30年続ければモノになるかもしれない) ③研究を国際学会で発表し他流試合をしろ(自己流に閉じこもるな)。そして先生は、フロイトもユングもどちらも天才だが、それでも二人の考えは一致しない。～アンにならず自分の頭で考えよ、と付け加えられた。

後年、先生は著書『悪魔のささやき』¹のなかで「悪魔につけこまれない本物の『知』の育て方」として詳細に述べておられるが、その「胚芽」に立ち会っていたのだ。自分らしさは誰もが求めてやまないものだ。心理学の領域では、主体性・アイデンティティ・本来感などさまざまなジャルゴンが飛び交い、また次々に新しい概念が生まれているが、「独り善がり」とは似て非なるものである点では共通している。ここでいう「悪魔」が何を代表しているかについては、さまざまに考えられるだろう。それでも、本物の「知」を身につけて、幼稚な自己中心性(独善)を自覚し、そこから脱出するためにはどうするのか? 表現する言葉は違っても、学びの根本テーマである。

ところで、学びを可能にする心理的土壌(準備状況)は無視できない。先生の著書の中から、太平洋戦争直後の小木先生の少年時代のエピソードを引用したい。「お父さん、僕はお腹がすいているから、畑を手伝えばなおさら腹が減って、せっかく作ったものをたくさん食べてしまうから、なるべく食べないように、体を動かさないようにしています」²と宣言したという。それから「ズボンのバンドをぎゅっーと締めて、水をたらふく飲んで、空腹を抑えて本を読む」毎日が続いたのだ。

読書は、小木少年の生理的飢餓をいっとき紛らわし、空腹な自分の惨めさを一瞬でも忘れさせるものでもあったようだ。このような単に知的好奇心というだけでは表現しきれない強い動機づけを、現代のわれわれのいったい何人が持つことができるだろう? 知的刺激物を貪欲なほどに吸収し、かつ選別して、真に自分にとって滋養となるものだけを身につける凄まじい探究。さまざまな領域で傑出した仕事を成し遂げた人々の生活史を見ると、必ずと言っていいほど、その人独自の激しい意志がさまざまな模様織りに織り込まれている。それを安直に追体験できないわれわれにわずかでも可能なのは、無批判に

他者の意見・行動に追従はしない、と心してものごとに取り組むことだけだと思う。

2 指導者からの学び

私の精神分析的心理療法の恩師の一人は、精神分析医・森田療法家の近藤章久先生である。初めて伺った時、面接室では西洋式の寝椅子(カウチ)だろうと予想していたら、普通のシングルベットに仰臥するように指示されて面食らったが、先生の自由連想の教示は次のようだった:「温泉に入ったときのように、ゆったりとした気持ちになって、頭に浮かぶことは何でも赤裸々にお話してください」。

先生から指導を受けてしばらく経ってから私が報告した夢は次である:「女の人の周りを柴犬がじゃれついているのを私は眺めている」。それに対して近藤先生が言われたのは、「ボクは君の夢を聞いて仏典の中にある『煩惱の犬』という言葉思い出した。追えども払えず、だったかな、払えども追えず、だったかな・・・精神分析は煩惱の分析なのです」。私は先生の言葉を黙って聞いていただけだったように記憶しているが、その数日後、偶然、『神経質の本態と療法』³に「煩惱の犬、追えども去らず」を見出した時は、あまりタイミングが良すぎてびっくりした。森田正馬が「強迫観念の対象は、ちょうどほえかかる犬のようなものである」ので、逃げずに睨みつけ、しっかり立ち向かえと説いていた。煩惱と強迫観念とは同義語である。五月蠅くつきまとい、吠えかかる犬のようなものをイメージして、私の個人分析が始まった。

自由連想を主とする先生との対話は、私が葛藤を自覚する場であった。そこでは煩惱の犬が駆け回るさまだけでなく、カズラとフジが纏れあって絡みつき容易に見分けがつかない様子を観察して報告することが求められていた(言うは易く行うは難し、であるにしても)。

治療者(カウンセラー)が専門家として何らかの悩みを持っているクライアントと面談をする場では、特殊な双方向性の対話が保証されている。そこでの関わりは個

人として対等ではあっても、両者は平板な横並びではありえず、日常・社交の視点を離れて対話することが求められている関係である。換言すれば、治療者はクライアントの話しを字義通りに理解するだけでは十分ではなく、彼らの言葉が本来伝えたいものを、そのままに受け止めることである。彼自身さえ気づいていない諸々の思いを相手に受け止められたときに（受け止められたと思った時に）、新しい行動が生まれる。相手に受け止められて初めて行動ができるようになる、あるいは逆に、受け止められることを期待せず自分自身で受け止めるしかなないと気づくことが大きな転機となる。それが可能となるためには、対話におけるさまざまな重層構造を読み・聴き取る能力が治療者に期待されている。だからこそ、精神分析医のベネディッティ、Gは対話する二人の関係では相補的に共同作業を行うことを強調しつつも、両者は「徹頭徹尾非対称な性格に基礎を置いている」⁴と表現している。二人は対等であるが、非対称的な関係にあるのだ。

われわれの日常における気づきは、早合点してわかったつもの洞察もどきが多い。早わかりを避けしじみと深くわかることは、愉快的体験どころか、苦痛でさえある。都合の悪いことを忘れ、自分の責任を認めずに外部に押し付けることは、精神分析で「抑圧」や「投影」の防衛機制として知られているとおりである。それだけでなく、都合の良し悪しにかかわらず「覚えたこと」（わかったつものこと）は時間の経過とともに忘れられるのが記憶の法則である。それでも、たんに覚えているだけでなく、時間の経過とともに（視点が豊かに洗練されて）ますます良くわかるようになるのが、真に学ぶことというべきだろう。「痛い真実」とは、葛藤に満ちた自覚の別名であるように思われる。近藤先生は私にゆったりと時間が流れる贅沢なスタイルの学びを体験させてくださった。

3 読書・翻訳を通じての学び

「国際学会で発表して武者修行をせよ」という小木先

生の教えは、残念ながらほとんど実行できなかった。その代わりとしては、量・質ともに実にささやかだが、読書や翻訳を通じての学びを考えてみたい。

フランクル、V.E. の『夜と霧』⁵を私が最初に読んだのは高校生の時だった。結果的に私が最も影響を受けた本であり、私の心理学の方向性を決めたといいても過言ではない。

私が上智大学に入学した1971年、心理学科の霜山徳爾先生は臨床心理学者としてもフランクルの『夜と霧』の翻訳者としても知られていた。心理学科の同級生は私と同じような動機で入学したと勝手に思い込んでいたので、ほとんどが読んでいないのを知ったときは意外な感じがした。

大学在学中は、本書について先生からじかにお聞きすることはほとんどなかった。（と、書いてみて、例外が少なくとも一度あった。1972年に都内の某デパートで『アウシュヴィッツ展』が開催されたとき、先生から、あれはほとんど独力で準備をしたと伺った）。しかし大学とも先生からも離れてずいぶん時間が経ってから、思いがけずに再会した。

あるきっかけから私は友人と『痛みの文化史』⁶の翻訳を始めた。そこに『夜と霧』が長々と引用されていたのだ。引用箇所は、先生の翻訳と照合してみると過酷な労役に疲れ切って倒れかかる収容者をすぐさま監視兵（カポー）が銃床で「立ち上がりやがる」ように殴りつける、という場面だった。

引用の英文から、最初私は単純に考えて、本来なら「立ち上がる」とすべきところの誤植と思った。そこで先生に葉書で問合せたが、なかなか返事がいただけなかった為、直接お電話でお聞きした。「カポーの汚い言葉遣いを表したかったから」とのこと。絶句した。ドイツ語初版でその箇所を確かめてみると（国内の某大学図書館のご好意によって初版本を郵送で閲覧させていただいた）、確かにフランクルもわざわざ引用符で強調した“aufgehen”となっていた。この言葉自体が「汚い言葉」なのかまで私には分からなかった。しかし、フランクルのドイツ語初版でも、そして彼自身による30年後の改訂版でも引用符は削除されずに残っていた。それに対して、私が参照した英訳書にはそのような強調は脱落し

ていた。

「カポーの汚い言葉遣い」まで読み取ることができる読者が、いったいどのくらいいるのか？ 先生は、わかる読者にのみわかればよい、という姿勢だったのだろう。初版は、フランクル本人もただ『一心理学者強制収容所を体験する』とだけ題して、著者名さえ明記せず出版するつもりだったという。この引用符つきの言葉は、直接に収容所を体験した、ごく限られた人だけが知る、一種の符牒や隠語の類だったのかもしれない。本書の訳出と出版に込められた先生の深い思いの一端に触れたような気がした。

その後、私は本書を「苦しんでいる人に慰めと勇気を与え、安逸に暮らしている人を立ち止まらせる」と評し、「臨床家のためのこの1冊」として『臨床心理学』誌⁷に紹介した。その時に私が引用したのは馴染んでいた旧訳書（旧版）からだったが、邦訳書の旧版か新版のどちらが良いかではなく、両方を実際に手にとって読み比べることを私は勧めたい。同じ大きさ（新版は活字が大きくて読みやすい）にもかかわらず、体裁が全く別で、原書の旧版・新版（改訂版）の違いというよりも、全く異なる本として扱うべきだから。ちなみに、上記で敢えて問題とした箇所は、新版（新訳書）では引用符なしに「立ちあがらせる」と訳されている。

ところで、フランクルが初版を改訂する時に新しく表題とした“Trotzdem 'Ja' zum Leben sagen”は、彼の他の邦訳書の表題に使われていて、「それでも人生に『イエス』と言う」となっている。意味するところは理解できるが私にはまるでじっくりこない表題であった。腑に落ちないとはこういう状態なのだろう。かといってそれに代わる訳語も思い浮かばなかった。それが思わぬ時に得心が行く言葉に巡り合った。山浦玄嗣先生の「ようがす、ひぎうげだ」がそれだ（2011年5月22日 NHK Eテレ・こころの時代）。私は散々に考えあぐねた末にわかった時の愉快さを味わった。

山浦先生は新約聖書をギリシア語原典から独学で郷里の大船渡の言葉（ケセン語と称している）に翻訳された方だ。そのケセン語にどんぴしゃりと移された例にならって、私も地元の福島弁では・・・と頭を悩ませてみて、ようやく、「さすけね、まかせてくなんしょ」かと思

いついた。いずれの東北弁も、いかなる現実も「引きうけた」「任せてくれ」という積極性・能動性があり「『イエス』という」ことの迫力とニュアンスがしっかり伝わってくると思う。

ある意見に説得されて不本意なままに、あるいはたいして疑問を抱かずにそんなものかと「模倣」から始まるとしても、収まりどころが悪いことが多い。そして、やがて疑問がわいてくる。消化不良の気持ち悪い感じが残る。疑問は、いつの間にかあいまいとなり、忘れられてしまうことのほうが普通かもしれないが、そのときに、自己の体験を基にして納得がいくまで考え進めていく態度から自分の考え・自分の言葉、換言すれば「主体性」が生まれてくる。主体性とは、苦心惨憺したあとに実る果実のようなものではないか。

『痛みの文化史』の翻訳は、私が始めて長時間にわたり英文と格闘した体験となった。原著者とEメールでやりとりして疑義を明らかにしたり、邦訳書のブックジャケットのデザインまで検討したり、二度と得がたい学びとなった。それというのも、古今の文学作品や彫像や絵画を多数引用し、痛みに苦しめられている人々に代わって、彼らの声を再生させ、痛みを歴史的・文化的・心理社会的構造において理解し直すことによって痛みを緩和する力を回復させたいという原著者の熱意に動かされたからだった。

4 学びの「場」の雰囲気

以上、私自身の学びを振り返り、私の心理学の最も基本的な方向を示すベクトルを明らかにしようとしたが、私がどのようなこと・ものを学んだかを次々に列挙しただけの印象を与えたかもしれない。そうであればなおのこと、重要であるにもかかわらずこれまで記述できなかったことを最後に明らかにしておきたい。学びが成立する「場」の雰囲気についてである。

長年私が心理臨床のご指導をいただいている心理療法師の乾吉佑先生がある時に、「私は皆さんの指導を預かっているだけです」とおっしゃった。厳しくも常にフ

レンドリーなお人柄とマッチしている言葉と思われた。その先生が実際の臨床指導では全くといっていいほど口にされていないにもかかわらず、その論文や著作⁸において実に再三にわたって使用されている鍵言葉は、「出会い」である。この言葉は、とりわけ昨今どこか胡散臭くなってしまった。それで、いくら距離がとれる活字としてだけ慎重に、お互いに学びあう出発点に立っているということを強調するためにどうしても使いたい言葉だったのかもしれない。先生は、学びあう関わりに上下を求めず、かといって馴れ馴れしい横並びとは無縁の姿勢を貫いておられる。始まりはあるが終わりはない、と。そして、小論で述べた諸先生方のご指導に共通しているのは、まさにこの雰囲気だと思う。あらためて学恩に感謝いたします。

「論語」に次のような名高い一節がある：「学んで時に之を習う、亦た説（よろこ）ばしからず乎。有朋（とも）遠方より来たる、亦た楽しからず乎」論語・学而第一⁹

有名な言葉だが、学ぶ「よろこび」と「たのしさ」が時間軸と空間軸に沿って限りなく広がっていく2種類の体験を活写している。最初は拙い模倣から出発しても、不可能が可能となり、未知が既知となることには、それなりの快感が生じる。しかし自分の殻に閉じこもった身勝手な「努力の快感」¹⁰から抜け出て、同学の友人と語りい真実を探るとい共同作業を求めていく。そうしてこそ相互交流に基づく学びの体験がさらに発展していく。このような学びに終わりはなく、いつまでも真理を問い続けていく生活を送る。これこそ私の理想である。Erikson, E. H. が『老年期』¹¹において「生き生きとした関わりあい」(vital involvement)の重要性を説いているのは、この意味だと思う。アイデンティティは生涯を通じて求めていくものであり、「働きかけることによって働きかけられる」双方向的で多様性 (diversity) を尊重する非対称的交流によってのみ形成されていくからである。

現在、インターネットを駆使した新しい学びのスタイルと方法論が次々にそして華やかに登場しているが、そのような学びの場に、今回の小論で展開した学びの条件が認められるかどうかを試金石にしてほしいと願っている。

【引用文献】

- 1 加賀乙彦 2006 『悪魔のささやき』 集英社新書
- 2 加賀乙彦 2012 『科学と宗教と死』 集英社新書 pp.39-40
- 3 森田正馬 2000 『神経質の本態と療法』 白揚社 p.154
- 4 ベネディッティ, G. 2003 『臨床精神療法』 小久保享郎・石福恒雄(訳) みすず書房 p.82
- 5 フランクル, V.E. 1961 フランクル著作集1『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』 霜山徳爾(訳) みすず書房
- 6 Morris, D.B. 1991 The Culture of Pain, University of California Press, California
モリス, D.B. 渡邊勉・鈴木牧彦(訳) 1998 『痛みの文化史』 紀伊国屋書店
- 7 渡邊勉 2010 「臨床家のためのこの1冊」『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録』 臨床心理学 10: 952-956
- 8 乾吉佑(編) 2013 『心理臨床との出会い—心理臨床家の成長』 金剛出版
- 9 桑原武夫 1974 中国詩文選4『論語』 筑摩書房 p.27
- 10 渡邊勉 2007 「『治らずに治った』再論—倉田百三と森田正馬—」 日本森田療法学会雑誌 第18巻2号125-132
- 11 エリクソン, E.H. 他 1990 『老年期：生き生きしたかわりあい』 朝長正徳・朝長梨枝子(訳) みすず書房